
拾われアイルーのオトモ生活（ライフ）

カズ吉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

拾われアイルーのオトモ生活^{ライフ}

【Nコード】

N1343H

【作者名】

カズ吉

【あらすじ】

簡単に言っちゃえばハンターのもとで働くアイルーたちの日常を勝手に考えたものです。

アイルー・プロローグ

「にやあああああああああ！」

リオレイアの下からアイルーとメラルーの鳴き声がしてきた。

「にやんだにやあああ？」

ギヤオオオオオ！

リオレイアがいきなりプレスをぶちまけた。アイルー達が一斉に地面に潜り始めた。かのように見えたが、一匹だけが潜り損ね、プレスに直撃した。

「にやあああ・あ・あ・あ・あ・あ・あ」

ドサ

アイルーはその場に倒れ込み、動かなくなった……。そしてリオレイアは何もなかったかのように飛び去り、姿を消した。

「……。い……。い……。おい……。おい！」

「にや！！？」

「おー、目えさめたか」

開けた目のすぐ前に見知らぬハンターがいた。

「いやあ、レイアを探してたらお前見つけてよあ、ほっとけねえからここまで連れてきたんだよ。すげえ傷だったから回復薬グレート使ってなおしてやったんだよ。」

「へ？」

よく見てみたら体の傷が跡形もなくなっていた。アイルーはいきなり武器を構え、殴りかかった。

「へ？」

バキイ

「イタツ！いきなり何すんだよ！！」

「そうやって僕を騙そうとしても無駄ニヤ！」

「何のことだよ！」

「とぼけても無駄ニヤ！そうやって油断したすきに僕を食うつもり

なんだニヤ？」

「誰がお前なんか食つか！」

二人の言い争いはしばらくつづいた。

アイルー・死闘の前兆

「何でついてくんだよ。」

ハンターはめんどくさそうにつぶやいた。

「なんでつて…なんとニヤくー!!」

「ふざけんな(怒)！お前なんかにかまってるヒマねえんだよ！
歩きながらハンターとアイルーが話していた。

「そう言えばあんたの名前って何だニヤ？」

「テリーだよ」

「変な名前ニヤ」

「うるせえ！てかさうゆうお前の名前は何なんだよ！」

「ニヤい！」

「はあ？」

話してるうちに二人は森岡エリア4(あたり)についた。

「確かこのあたりに来るはずだが・・・」

ムシヤムシヤ

「ん？て、あああああああああ！！」

アイルーが黄色い生肉をむさぼっていた。

「これ結構いけるニヤ」

「なにやってんだあああ！それレイアおびき寄せるために仕掛けた
シビレ生肉だぞ！」

「ニヤ？」

ビビビビ

「ニヤアア！しびれるニヤ〜〜！」

「あ〜も〜！農台無しじゃねーかよ」

「ニヤ〜、ご、ごめんニヤ〜」

「は〜。モ〜やる気失せたわ〜」

「ニヤ〜〜〜〜！」

アイルーが叫び出した

「今度はな・・・」

ズツドオン

リオレイアが舞い降りてきたのだ

グアアアアアアア　ブアアアアア

咆哮と風圧が容赦なく一人と一匹を襲った

「うおおあああ！」

「ニャー……！」

リオレイアがサマーソルトで二人を吹き飛ばした
ドツゴオン

「がつ！」

「ニャボブツ！」

ドサツ（×2）！

「痛〜。おい！大丈夫か！？」

「な・なんとか・・・」

ドツドツドツドツ

リオレイアがもの凄い勢いで突進した

「ちい！」

テリーはとっさに武器を取り出し巨大な刀身を盾に攻撃を防いだ
ガギイン

「グツ」

ズザアアア

テリーは後ろによるめいた

「ヘッ！やるじゃねーかよおー！」

ズバア

ギアアアアア！

テリーがリオレイアに切りつけ、すかさずアイルも攻撃した

「これでも食らえニャー！」

ザシユツ

ギアアア

リオレイアは怒って咆哮をあげた

グアアアアアア

「これからが本番か」

リオレイアと二人はにらみ合い、戦いはつづいた・・・

アイルー・ハンターの手伝い

「グアアアアア！！」

ドツドツドツドツ

「ぬおお！」

バツ

テリーは紙一重でリオレイアの攻撃をかわした

ズドオン

リオレイアは勢いあまって転倒した。

アイルーがすかさず攻撃をしかける

「すきありニヤー！」

ズバア

「グアアアアア！！」

「ぬおりやああ！！」

ズバア

「ギヤウアアアア！」

リオレイアの尻尾が切断された

「うっし！切断成功！！」

「グルル・・・」

スウウ・・・

「グオアアアアアア！！」

「がつ！」

「ニヤ〜！」

咆哮が二人の動きを止めた

バサツバサツバサツ

ブオアアア

「こ、今度は風圧か！」

「と〜ば〜さ〜れ〜る〜！」

ブアアア

「ヤベツ！逃げられる！」

ガサガサ

テリーはアイテムポーチをあさった

「あつた！」

フアア

「うりやあああー！」

ブオン ヒユウウン ボスッ

「うし！命中！」

バアアアアア

「行つたか……」

「さつき何投げたのニヤ？」

「ああ、ペイントボールだよ」

《ペイントボールとは…モンスターにぶつけて強烈なおいと色を
付着させ、モンスターの足取りをつかむ事が出来る優れモノなのだ
！！》

「ふん…」

グビツ×3 モグモグ

テリーは回復薬を飲み、こんがり肉を食べた

「うし…行くか！」

「んニヤ！」

スタスタスタ…

「そーいやお前確かアイルー一族の村って呼ばれてるトコロの近くで
倒れてたよな？」

「だから何ニヤ？」

「いや…別に……」

「？」

「どした？」

「何か…ここにおうニヤ……」

「ああ、さつきリオレイアに当てたペイントボールの匂いだろな。
…たぶん」

そこはエリア5だった

「ここに来るとなると・・・もう瀕死なんだろうな」

「じゃあ早く行って倒しちゃおうニャ！」

たたたたたた 急ぐアイルーの尻尾をテリーが踏みつけた

グギユッ

まてまてまてい！」

「ニャー！ー！ー！ー！！尻尾だけはやめるニャー！！！」

「アホ！あいつ（リオレイア）は寝てんだぞ！下手に攻め込んで帰りうちにあつたらどーする！」

「ブー！」

そ〜と二人はエリア5（洞窟）に入って行った
ギャアギャア

中ではランポスがギャーギャー騒いでいた

「見つかったら面倒だ・・・」

「みたいたニャ・・・」

「ここはけむり球を投げるか・・・」

ヒュッ バフオオオ

エリア5はけむりで埋め尽くされた

「よし」

「行くかニャ？」

「まずはランポスだ」

「OKニャ」

二人は駆け出してランポスに切りかかった

アイルー・狩終わり？

ズバツ バキツ ドゴツ

「も〜いねーなツと」

「もう終わりかニヤ？つまん無かったニヤ」

テリーとアイルーはエリア5のランポスを倒しきった

「あとはリオレイアだけか・・・」

グウ〜グウ〜

「爆睡してるけど…どうやって起すのニヤ？」

「ま〜見てなつて！」

テリーはリオレイアの前に立ち、背負っていたゴーレムブレイド改を構え、力を貯め始めた「はああああ・・・」

「？」

キイン キイン

だんだん音が大きくなり、刃にオーラのようなものがかまとい始めた

キュイイン

「のおおおおおりやあああああ！！！！！！」

ズツドオオオン

グアアアアアア！！！！

リオレイアはいきなり攻撃を食らい、驚いたようにもがいていた

「今ニヤアア！！！！」

ズバババ

「オラオラニヤー！！」

がさがさ

テリーが穴を掘っていた

「何してるニヤ？」

「まてまて」

「？」

テリーが穴を掘ったところに円形の機会が埋まっていた

バシユウウ

という音とともに、ネットが飛び出した

「何ニヤ？それ？」

「落とし穴だよ」

《落とし穴とは・・・トラップツールとネットを調合した罠の一つ。重量級のモンスターに有効だが、中型モンスター（ドスランポスなど）には無効》

「アイルー！こっち来い！」

「でも・・・」

「いーから早く！」

「も〜」

スタタタ

ドツドツドツドツ

リオレイアはすぐさま立ち上がり突進を繰り返す

「早いニヤー！」

「急げっ」

ガッ

「ニヤッ？」

アイルーはつまずいてゴロゴロ転がってきた

「ニヤーーーーー！」

「わーー！」

ドオン

「う〜」

ボスウ

ギヤアアア？

リオレイアが落とし穴にかかった

「それえい！」

ポフツポフツ

ガアアア…ア

ドオオオン

リオレイアは倒れ込み、花提灯を出して寝てしまった

「????」

「お、終わったあゝ」

「何したのニヤ？」

捕獲したんだよ

「ふゝん」

「さて・・・目標も達成した事だし、村に帰るとするかな」と

「僕も行くニヤ」

「はあ？」

「あんたのオトモになりたいニヤ！」

「なんでまた急に・・・」

「いいから連れてくのニヤー」

「・・・」

「・・・」

「わかったよ。連れてってやる！」

「ほんとかニヤ!？」

「ただ俺のオトモニなったからには俺の指示に従ってもらおうぜ」

「OKニヤ！」

「んじゃ行くぞっ！」

「ハイニヤ」

二人は村に向かって歩き出した。

アイルー・村デビユー 全編

ガラガラガラ・・・

村の入り口に一台の馬車が止まった

「ハンターさん、着きましたよ」

「フア〜・・あ、ついた？ゴクロ〜サン。お〜い起きろ〜」

「ニヤ〜・・ここどこニヤ？」

「おれの住んでる村だよ。パ口村ってんだ」

「ふ〜ん」

入口には村長らしい老人がいた

「おお、テリーか。ん？そのアイルーは？」

「ああ、森岡で拾ってきた」

「ほう…」

「初めましてニヤ」

「で、リオレイアは倒せたのかい？」

「もちろん」

「そうかい、さすがだねえ。ほれ、報酬金だよ」

「あんがと」

テリーは報酬金を受け取り村に入って行った

「そんじゃまた」

「ああ、またいつでも来なね」

スタスタ

「お〜いネコ婆〜」

テリーは一人の老人に話しかけた

「何じゃいテリー」

「あさ、このアイルーがオレのオトモになりたいらしいんだけど、登録しといてくんね〜かな」

「ああ、いいよ」

「ありがと。アイルー、ここで待ってるよ」

「ハイニヤ」

「んじゃヨロシク」

テリーは煙突のある家に向かって行った

「親方ー！居るかー！？」

「オウ！居るぞ」

中から大きい肉体派の男が出てきた

「親方、頼んであった武器の強化と防具の生産終わってる？」

「おお、たった今終わったところだ。今持ってきてやるっ」

親方は中に入って行った 一方アイルーは…

「名前は何だい？」

「え〜と…ニヤイです…」

「え？」

「僕の一族は名前を付けないのが伝統ニヤのです」

「そうかい、じゃあ…コテンってのはどうだい？」

「いい名前にゃ。気に入ったニヤ。それがいいニヤ」

「はいよ、名前コテンっと…」

カキカキ

「ハイ、終わりだよ。これであんたも正式なテリーのオトモだ」

ガシヤガシヤ

「あ、終わった？」

テリーが防具を抱えて歩いてきた

「アー終わったニヤ」

「ほれ、契約書だよ」

「ちよっ…アイル…」

「僕はコテンニヤ！」

「あ…名前付いたんだ。んじゃコテン、持って」

「ハイニヤ。」

コテンは契約書を受け取った

「確かに頂きましたニヤ」

「んじゃ帰るか。ネコ婆、アリガト」

「どういたしまして」

「家はどこニヤ？」

「ここ」

「え？」

周りを見ると近くに家があった

「この家だ」

「へー」

スタスタ

「コテン開けて」

「ハイニヤ」

ガチャ ギ

テリーとコテンは家に入って行った

アイルー・村デビュ― 全編（後書き）

アイルーの名前でもあるコテン。この名前は剣十さんの小説の中のアイルーの名前と同じですが、気にしないで読んでください。

あ、あと次回からタイトル変えますんで、宜しくお願ひします。新タイトルは拾われアイルーのハンター生活^{ライフ}です。

アイルー・村デビュ― 中編(前書き)

今話からキャラのプロフィールを後書きに書いてきますんで

アイルー・村デビユー 中編

ガチャ ギ

「あゝ重かった」

ガシャ

テリーは家に入ると、大きな箱の中に防具をしまつてゴーレムブレイド改を壁に立てかけて奥の部屋に向かった

「ついてこい」

「？」

着いたのは広いキッチンだった

「あ、旦那様。お帰りニヤさいませ」

「「「お帰りニヤさいませ」」」

一斉にコック服を着たアイルー達がテリーに挨拶をした

「お、ただいま」

「何なのニヤ？ここは？」

「おれん家のアイルーキッチンだよ」

《アイルーキッチンとは…ネコ婆から雇ったキッチンアイルー達の職場である。また、オトモアイルーの住処（？）でもある。》

「おゝい。ジャスミン、ハンゾ」

「「およびでしょうか？」」

奥から侍の鎧のようなものを身にまとった二匹のアイルーが駆けてきた

「ちゃんとサボンね〜でトレーニングやってたか？」

「「もちろんですニヤ！」」

「ん？ご主人さま。そのアイルーは？」

マスカット色のアイルーがテリーに聞いた

「ああ、今日雇ってきたアイルーだ。ほら、自己紹介は？」

「コ、コテンと申しますニヤ！宜しく願いしますニヤ！」

「コテンですかニヤ。私はジャスミンと申しますニヤ。以後お見知

り置きを」

「オイラはハンゾーだニヤ。宜しくニヤ」

《ちなみに、ジャスミンの毛並みがマスカットで、ハンゾーの毛並みが灰トラです。》

「おい、コテン」

「ニヤンでしようか？」

レモン色の毛並みでコック服を着たアイルーが話しかけてきた

「コテンさん、ネギと幻獣チーズを買ってきてほしいニヤ」

「ハイニヤ」

コテンはお金とエコバックを受け取った

「さてと…おれは村長と依頼の話してくるわ」

「行ってらっしゃいませ」

「コテン行ってらっしゃいませ」

「コテンおう（ニヤ）」

ガチャ ギ

二人は外に出た

アイルー・村デビュイ 中編（後書き）

その1

テリイ

職業 ハンター

性別 男

武器 大剣

年齢 18歳

本小説の主人公です。結構頭がよく、戦略でモンスターを狩ってきます。両親がハンターだったのでハンターになったということになっています。

アイルー・村デビユー 後編

「売ってんのはあつちだ。間違えんなよ」

「もちろんな」

テリーとコテンは別々の方向に歩き出した
すたすた

コテンが乳製品専門店の管番がある所に着いた

「すいませーん」

「はいよ」

「え〜つと・・・」

カサカサ

「あつたニヤ」

コテンが文字の書いてある紙を取り出した

「えつとですねえ・・・幻獣チーズをください」

「あいヨウ」

がさがさ

「ほい、幻獣チーズ」

「どうもですニヤ」

一方テリーは・・・

「これなんかどうだい？」

「う〜ん・・・」

村長と依頼の話をしていた

「お？」

テリーが一枚の依頼書を手に取った

「フルフルかあ・・・」

「あつ、それはやめといた方がいいよ」

「なんでさ？」

「そのフルフルは最近この近くの雪山に住みついたやつでねえ・・・」

「それが？」

「それが結構大きくてねえ、おまけに強いときたもんだ」
「ふうん…」

「さすがに一人じゃ無理じゃないかい？」

「だよねえ…」

「仲間でも作ったらどうだい？」

「仲間かあ・・・んじゃそうでもしとこうかな」
すたすた

「仲間か…募集のチラシでも作って掲示板に張っとけばいいのかなあ…あ、ついでに親方に強化も頼んどこうかな」
すたすた…

「おゝい、親方〜」

「一方コテンは…」

「どうもですニヤ」

買物が終わっていた

「さ〜て帰るかニヤ〜」

すたすた…

ガチャ ギ〜

「ただいま戻りましたニヤー」

「あ、コテンさん」

「ホイニヤ」

「どうもですニヤ」

コテンはハンゾーのいるところに向かった

アイルー・村デビユー 後編（後書き）

登場人物 その2

名前 コテン 性別 オス

職業 オトモアイルー

年齢 8歳 武器 ネコノタチ

テリーのオトモアイルー。出身地は森丘である。
結構早とちりが多く、おとなしい方。メラルーとは仲が悪い。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1343h/>

拾われアイルーのオトモ生活（ライフ）

2010年10月26日01時31分発行